

20代でやるべきこととして、H先生には、「校長室だより～燦燦～No.213『20代の特権』」と同「No.333『自分を育てる』」を渡した。要は、20代は失敗しても失うものは少なく、むしろ得られるもののほうが多いということである。ゆえに、チャレンジあるのみである。

教員として年間2～3回は、研究授業を行っていきたい。年間2～3回のめやすは、学期に1回ずつである。ここでの大事なポイントは、研究授業を行うと、その本時だけでなく、本時を含む単元などの学習のまとまりの授業レベルが上がる点である。

研究授業は打ち上げ花火ではない。単元全体が計画的、意図的な営みとなる。1つの単元が10時間だとする。この10時間の授業レベルが上がるとしたら、生徒にとっては大きいのではなかろうか。研究授業を2回実施すれば、計20時間の授業レベルが上がるのである。授業が変われば生徒が変わる、という域に達するかもしれない。

研究授業を行ったら、その足跡をファイルなどに残しておくことである。教材研究ノート、学習指導案、ワークシート、生徒のノートのコピー、指導助言の記録などである。年度ごとのアルバムをつくっていくのである。何事もやりっぱなしはよくない。まとめることで見えてくることがある。ファイルして残しておけば、いつでもすぐに出せる。必ず使うときがくる。H先生は、講師時代から積み上げてきた教材研究ノートが現在8冊目だそうである。これは大きな財産であり、彼の力となるものである。ぜひ30代になったら、20代の後輩教員に見せてあげてほしい。そんな先輩教員になってほしい。

教員は、記憶に頼る傾向がある。「去年は、確か～でした」といった調子で。記憶はあてにはならない。確かなものは記録である。記憶はいずれ消えるが、記録はいつまでも残る。何事もファイルし記録として残しておくことが重要である。ファイリング上手は、記録上手であり、仕事上手である。

学級担任を務める場合に、学級経営の柱として何を置くか。決まったものはない。学級通信、生徒との交換ノート、担任としての日々のメッセージなど、いろいろと考えられる。私の場合は、学級通信だった。卒業式や終業式の日製本して生徒に渡した。お世話になった先生方にも渡した。最初から製本されることを前提に内容を考えてある。次週の予定などの連絡事項はない。生徒の名前が何度も出てくる。生徒の書いたものなどがたくさん出てくる。製本されたものだから、生徒は大人になっても、引っ越しの度にでも、すぐに読むことができる。

日刊で出していたときのものは、けっこう多めに製本したのだが、いろいろな方の手に渡り、もはや自分の分しか残っていない。年間100号出していたときのものが奇跡的に数部残っていた。2年目のH先生と1年目のSS先生にプレゼントした。これをどう活用するかは、彼ら次第である。もう20年以上前の遺物だが、学級担任としての神髄は、今も昔も変わらない。

H先生は、いつ天ぷらを揚げることになるのか。30代半ばから後半あたりであろうか。その1年は、H先生にとって特別な年になるはずである。天ぷらは高温で一気に揚げるものである。教員にも短期集中でエネルギーをかける1年が必要である。これが、その後の教員人生を大きく左右することになる。人との出会いもあるはずである。それは、自分の人生に影響を与える出会いのほうである。

ただし、天ぷらを揚げるその年がくるまで、努力を積み重ねなければ、出会いもないし、天ぷらを揚げる機会もやってはこない。H先生もSS先生も、きっとからっと天ぷらを揚げるに違いない。